



震災を乗り越えて—世界とつながる—

Beyond 3/11

Uniting with the World

2012年度 事業報告書

国際交流基金 ジャパンファウンデーションとは

独立行政法人国際交流基金は、世界を対象に国際文化交流事業を実施する機関です。1972年10月に特殊法人として設立され、2003年10月に外務省所管の独立行政法人として改組されました。現在、本部と京都支部、ふたつの附属機関(日本語国際センター、関西国際センター)、および海外21カ国に開設された22の海外拠点を中心に、外部団体と連携しつつ、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流を3本の柱として事業を展開しています。

「震災を乗り越えて 一世界とつながる」

国際交流基金は2011年度末、東日本大震災から1年の機会に、舞台公演、展覧会、講演会、映画上映会からなる総合文化事業「震災を乗り越えて―日本から世界へ―」を実施しました。震災直後より世界中から日本に寄せられた温かい支援に対する感謝を示し、東北地方が本来もつ豊かさを紹介し、国際社会に対して復興への決意を伝えることを目的としたものです。震災後の日本からのメッセージを、文化を通して世界各地に向けて集中的に発信しました。

これら一連の事業を行う過程で、被災地と海外との間には、さまざまな結びつきがあることに気付かされました。海外からの支援が、実は過去の災害の際に日本から送った支援への返礼であったり、遠く離れたふたつの町が、同じような被災経験をもつ故に理解し共感し合えたり、震災以前からの長い歴史をもつ絆があれば、震災を契機に生まれた交流の萌芽もあちこちに見られました。被災地に対する持続的で深い理解を海外で得るためにはこうした交流の芽を大切に育てていく必要があるだろう、被災地の現場で生まれ、営まれる交流を支援することで、被災地の人びとを励まし復興への歩みを支える活力が生まれてほしい――2012年度、震災から2年目となるこの年、私達は日本からの「発信」に加え、復興のために尽力するさまざまな人や団体と協力しながら、被災地と海外の「交流」や被災経験・復興への取り組みの「共有」を意識した事業を企画することとしました。

この冊子は2012年度の取り組みとして国際交流基金が実施した10の事業「震災を乗り越えて一世界とつながる」の報告書です。それぞれの事業の概要に加え、海外での反響や参加した人の声を出来る限り多く掲載するよう心掛けました。被災地の現実は厳しく、国際文化交流が復興に貢献できることには自ずと限界もあります。しかし、参加したたくさんの方々の声には、文化交流が何らかの形で応援となり得ることを感じさせるものが多くありました。こうした声を励みに、今後も被災地をはじめ日本と海外との文化交流に邁進する所存です。

報告書を発行するにあたり、本事業にご協力いただいた、すべての方々に厚くお礼申し上げます。

国際交流基金文化事業部

2013年10月

「震災を乗り越えて——世界とつながる——」

2012年度は、被災地と海外の交流、被災経験や復興への取り組みの共有を意識しながら、「復興・再生へむけて」「東北を伝える」「経験の共有・交流」という3つのテーマを設定し、事業を実施しました。関係者311人の協力を得て14カ国を対象に10の事業を行い、7万1,248人の人達がそれらに参加しました。

復興・再生へむけて



被災地では、復興・再生へ向けた多様な取り組みが行われています。音楽の力でコミュニティを支えるオーケストラ、津波で甚大な被害を受けた牡蠣漁の再生を通じた町の復興、震災直後からの被災地での建築家達の試み等、さまざまな分野で行われている取り組みを国際社会と共有する事業を実施しました。

仙台フィルハーモニー管弦楽団 ロシア公演

p.6-9

サンクトペテルブルク 2013年3月27日/モスクワ 2013年3月30日・31日 学校訪問 2013年4月1日

宮城牡蠣料理欧州巡回レクチャー・デモンストレーション

p.10-11

パリ[フランス] 2013年2月9日/ワルシャワ[ポーランド] 2013年2月12日/ドルトムント[ドイツ] 2013年2月15日

3.11——東日本大震災の直後、建築家はどのように対応したか [講演会] + 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展シンポジウム

p.12-13

釜山[韓国] 2012年5月17日/ソウル[韓国] 2012年7月5日/モスクワ[ロシア] 2012年6月22日
 エレヴァン[アルメニア] 2012年7月17日/香港[中国] 2012年10月19日/北京[中国] 2012年11月29日
 ローマ[イタリア] 2012年10月23日/ケルン[ドイツ] 2012年12月12日/ヴェネチア[イタリア] 2012年8月29日

東北を伝える



“被災地”として世界中から注目されることとなった東北地方。しかし、東北地方の自然や歴史、伝統に育まれた豊かな文化は海外にあまり伝えられていません。2011年度に引き続き、東北地方が本来もつ豊かな魅力を海外に紹介するため、英国のフェスティバルや米国の野球場での始球式等、多くの人が集まる場での鹿踊り公演、また東北の姿を伝える写真展の会期にあわせた講演会を実施しました。

奥州金津流獅子躍 英国公演

p.14

オクスフォード 2012年9月6日/メイドストーン 2012年9月7日/ロンドン[テムズ・フェスティバル] 2012年9月8日・9日

行山流水戸辺鹿子躍 米国公演

p.15

アーリントン[テキサス・レンジャーズ対タンパベイ・レイズ戦始球式] 2012年8月28日/ダラス 2012年9月1日・[日米草の根交流サミット大会閉会式] 2012年9月2日

東北——風土・人・くらし [講演会]

p.15

マニラ[フィリピン] 2013年3月9日

経験の共有・交流



撮影：相川健一

はるか遠くの町に暮らしていても、同じ被災経験をもつ者同士だからこそ得られる理解と共感があります。宮城県各地と米国ニューオリンズの青少年達はジャズを通じて、南三陸とチリの高中生達は詩と物語の交換を通して、それぞれの被災経験を共有しながら交流を行いました。また、「日本—フランス紙芝居共同制作」と「ノルウェー・スコットランドアーティストの喜多方滞在制作」では、海外からアーティストを招へいし、その土地での滞在と土地の人との交流を通して作品制作を行いました。経験の共有と交流の取り組みです。

宮城——ニューオリンズ 青少年ジャズ交流

p.16-17

石巻[石巻ジュニアジャズオーケストラと共演] 2012年10月7日/気仙沼[気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」と共演] 2012年10月8日
 仙台[多賀城ブライトキッズほか仙台のジャズバンドと共演] 2012年10月9日/仙台[東北学院中学校・高等学校吹奏楽部との交流] 2012年10月10日
 公開報告会・東京 2012年10月11日

南三陸——チリ 青少年音楽・詩作交流

p.18-21

ワークショップ [日本・チリ] 2012年10月—2013年2月
 公演 [チリ] 2013年2月27日・3月1日/[日本] 2013年3月11日・12日・15日

日本——フランス紙芝居共同制作

p.22

制作期間2012年8月—10月
 読み聞かせ会[気仙沼] 2012年10月22日/[東京] 2012年10月23日/パリ[フランス] 2013年3月19日・20日

ノルウェー・スコットランド アーティストの喜多方滞在制作

p.23

滞在制作期間[喜多方] 2013年1月—3月





復興・再生へむけて

復興と感謝の調べ

仙台フィルハーモニー管弦楽団 ロシア公演

被災地唯一のプロオーケストラとして、震災直後から被災者のもとに音楽を届ける活動を続けてきた仙台フィルハーモニー管弦楽団。「音楽の力」によって復興へと歩む被災地の姿を伝えるため、震災後に海外から寄せられた支援への感謝を込めて、仙台フィルハーモニー管弦楽団ロシア公演を実施しました。

東日本大震災から2年を経た2013年3月、仙台フィルハーモニー管弦楽団がロシアのモスクワとサンクトペテルブルクで、計3回の演奏会を実施しました。震災直後、ロシアからは、2隊の計156名にも及ぶ救助隊員が宮城県石巻市に派遣されて捜索や救助活動にあたり、被災地に向けて多くの救援物資や寄附も届けられました。またサンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団は指揮者のユーリ・テミルカーノフ氏とともに、震災の翌月である2011年4月、終えたばかりの米国公演の収益金から4万米ドル近い義捐金を「同じオーケストラとして力になりたい」として仙台フィルハーモニー管弦楽団に贈っています。今回の公演は、ロシアから被災地、そして仙台フィルへの支援

公演	2013年3月27日	サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団大ホール	観客数：1,550人
	2013年3月30日	モスクワ国立音楽院大ホール	観客数：1,200人
	2013年3月31日		観客数：1,300人
学校訪問	2013年4月1日	モスクワ・第1959番学校	

に対する謝意を表したいとして、また音楽によって、復興へ向かう被災地の姿を伝えるために企画されました。仙台フィルは、被災者のために数々のチャリティコンサートを続け、被災地の人びとと復興への歩みをともにしてきた「被災地のオーケストラ」です。「仙台フィルの海外公演が実現したらみんな喜ぶ」、「復興に向けてく楽都仙台>らしい音楽を通じた国際交流ができれば」等、出発に至るまでにも、地元関係者のみならず、東北各地から沢山の応援の言葉が届きました。

“復興コンサート”の活動について

仙台フィルは、震災により活動拠点であったホールが甚大な被害を受けて活動の場を失い、数カ月の間、活動を休止せざるを得ない状況にありました。しかし、震災前から学校訪問など地元市民と密着した活動に重きを置いてきたオーケストラは、「困難な時だからこそ、音楽の力で市民を支えたい」と、「音楽の力による復興センター」を創設し、震災後わずか2週間後の



【上と前頁】サンクトペテルブルク公演より
【下】モスクワ公演での宮城三女OG合唱団 ©Anna Rybalco Photography

2011年3月26日から「復興コンサート」の活動を開始します。日本では多くの催しが自粛されていた状況での活動再開でした。楽団員たちは避難所、病院、学校、仮設住宅に赴き、余震に悩まされながらも被災者のもとに音楽を届ける活動を続け、2年間の間に300回近くのコンサートが行われました。「音楽の力」は、家族やそれまでの暮らしを失った多くの人びとを慰め、励まし、地域再生への歩みを支えたと言われています。「震災後涙も出なかったが、仙台フィルの音楽を聴いて初めて泣くことができた」という聴衆の声は少なくありません。復興コンサートの活動のようすは今回、ロシアでも紹介されました。

復興と感謝の調べ

ロシアでの公演では、震災で亡くなられた方々への追悼の意を表す武満徹の「弦楽のためのレクイエム」や、ドヴォルザークが遠く自らの故郷を想って作曲し、仙台フィルの復興コンサートでも度々演奏された「新世界より」、また、ロシアでも高い人気を誇るヴァイオリニストの神尾真由子氏をソリストに迎えた、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲などが披露され、パスカル・ヴェロ指揮による演奏に、会場に詰め掛けた満員の観客は聞き入りました。アンコールで演奏された日本の唱歌「故郷」が終わると、仙台フィルのメンバー達はロシアからの支援への感謝の意を伝える横断幕を掲げて、客席からの歓声に応えました。

指揮：パスカル・ヴェロ / Pascal Verrot

仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者。フランス・リヨン出身。アメリカ、カナダ、フランスの楽団で指揮者、音楽監督を務めたのち、2006年4月、仙台フィル常任指揮者に就任。そのはつらつとした指揮は多くの人を魅了している。

ヴァイオリン：神尾真由子

2007年第13回チャイコフスキー国際コンクールで優勝、一躍世界で注目を集める。ニューヨークのリンカーン・センターをはじめとする世界各地でのリサイタルは絶賛を博し、また数々の著名な指揮者やオーケストラと共演している。

仙台フィルハーモニー管弦楽団

1973年、市民オーケストラ「宮城フィルハーモニー管弦楽団」としてスタート。78年よりプロ・オーケストラとして活動を開始。89年に本拠地の名を冠し「仙台フィルハーモニー管弦楽団」と改称。仙台の音楽文化の振興に大きく貢献している。

宮城三女OG合唱団

2001年12月に宮城県第三女子高等学校（現・宮城県仙台三校高等学校）音楽部のOGで結成された合唱団。主な活動としてコンクールへの参加や各種イベントへの出演、海外での公演など幅広い活動を展開している。

プログラムA	3月27日	武満徹	弦楽のためのレクイエム
	3月31日	チャイコフスキー	ヴァイオリン協奏曲ニ長調 作品35
		ドビュッシー	夜想曲
		ドビュッシー	海—管弦楽のための3つの交響的素描
プログラムB	3月30日	エルガー	「エニグマ変奏曲」より第9変奏「ニムロッド」
		ビゼー	歌劇「カルメン」より抜粋
	3月31日	外山雄三	管弦楽のためのラプソディ
		ドヴォルザーク	交響曲第9番ホ短調 作品95「新世界より」

制作 公益財団法人 仙台フィルハーモニー管弦楽団
制作協力 一般財団法人 音楽の力による復興センター・東北

その姿に総立ちとなった観客からさらに大きな拍手が贈られ、支援への感謝と、音楽の力で復興へ歩む被災地の姿を力強く印象づける公演となりました。

また、開演前の会場では、オーケストラ団員達が「ありがとう—Спасибо」と日露両国語で書かれたステッカーを来場者ひとりひとりに手渡し、各公演の会場では、仙台市の復興の現状や、仙台フィルが続けてきた復興コンサートのようす、海外から寄せられた数々の支援などが写真パネルや映像で紹介されました。仙台に伝え継がれる大きな七夕飾りも展示し、公演に訪れた多くのロシアの人びとの目を惹きつけました。



仙台フィルが2011年4月に仙台駅に近い公共スペースで開催した復興コンサート。地元の人に寄り添った活動が多くの人々の心を癒した
撮影：永井秀男



モスクワの第1959番学校を訪問したこの日の演奏は、弦楽四重奏や木管五重奏のスタイルで。ロシア民謡「カリムカ」等が演奏された◎



第1959番学校では仙台フィルのメンバーが演奏しただけでなく、学校の生徒達も歓迎の歌と踊りを披露してくれた◎

第1959番学校を訪問

3つの公演が終了した4月1日、仙台フィルのメンバー10名がモスクワ近郊の第1959番学校を訪問しました。この学校は日本の小学校から高校にあたる年齢の生徒が通う学校で、東日本大震災の際には全校で千羽鶴を折ってモスクワの日本大使館に届けてくれました。今回の訪問にあたって、校長先生はじめ学校を挙げてメンバーを歓待してくれました。

仙台フィルのメンバーは、復興支援活動を紹介し、弦楽四重

奏や木管五重奏で、前日までの大ホールでのフルオーケストラによる荘厳な演奏とは趣の異なるしっとりとした演奏を披露。そのお返しに、学校の先生やお揃いの衣装に身を包んだ生徒達も、可愛らしい歌を聞かせてくれました。仙台フィルのメンバー達によるミニ音楽ワークショップでは、生徒全員が椅子から立ち上がって体を動かす盛り上がりぶりで、最後は、震災後度々なく被災地で口ずさまれ、サンクトペテルブルクとモスクワ公演のアンコールでも披露した「故郷」を全員で合唱し、温かい交流の場となりました。



サンクトペテルブルクやモスクワでの公演では、全曲目の終了後、ロシア語で「ロシアのみなさまのご支援に心から御礼申し上げます」というメッセージが書かれた横断幕を掲げ、被災地からの感謝の意をロシアの聴衆に届けた

仙台・河北新報社より仙台フィルロシア公演取材のため全行程に同行した菅野俊太郎記者のレポートより

「聴衆が総立ちになった熱演」

公演は27日、サンクトペテルブルクで幕を開けた。テミルカーノフ氏が音楽監督を務めるサンクトペテルブルク・フィルの本拠地、フィルハーモニー大ホールは開場と同時に1500席全てが埋まり、通路で立ったまま聴く人もいるほどだった。最初の曲は武満徹「弦楽のためのレクイエム」。被災者に黙とうをささげる鎮魂歌を選んだ。次の曲は、2007年のチャイコフスキー国際コンクールで優勝した神尾真由子さんをソリストに迎えたチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」だ。神尾さんは艶やかに、そして凛とした音色を奏で、オーケストラが応

えていく。特に第3楽章で、独奏ヴァイオリンと、オーケストラの弦管楽器が競い合うように演奏するところが印象的だった。後半は、ドビュッシー「夜想曲」「海一管弦楽のための3つの交響的素描」。夜想曲は仙台フィルに同行した宮城三女OG合唱団が第3曲の「シレーヌ」で参加。美しい歌声を披露した。アンコールの唱歌「故郷(ふるさと)」でも合唱団が美しい歌声を聴かせた。公演後、聴衆は総立ちで熱演をたたえた。ロシアの支援に感謝を伝える横断幕を楽団員が掲げると、拍手は一層大きくなった。舞台上では、目頭を押さえる楽団員の姿も見られ、感動的なフィナーレだった。私は仙台フィルに限らず、クラシックの演奏会にずいぶん足を運んできた。その中で涙腺が緩んだのは今回が初めてだ。

*本稿は国際交流基金「をちこちMagazine」に菅野記者が寄せたレポートの抜粋です。なお、本事業の取材記事は3日にわたり河北新報に連載されました

公演について寄せられた声

素晴らしかった。オーケストラの特別な思いが今夜の演奏から感じられた。
[公演来場者 3月27日 サンクトペテルブルク]

またいつかモスクワで仙台フィルの公演を聴きたいです。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

私達こそ感謝の気持ちを感じている。公演が喜びを与えてくれたから。この催しは、友情と連帯の証だ。
[公演来場者 3月30日 モスクワ]

もっと日本の文化について知りたいです。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

被災地の人びとを自分のことのように案じています。速やかな復興を心よりお祈りします。
[モスクワ音楽院関係者 3月27日 モスクワ]

生徒・児童たちに素晴らしい音楽交流の機会を与えてくれたことに感謝したい。
[第1959番学校関係者 4月1日 モスクワ]

2011年3月の悲劇の記憶に捧げられた演奏だが、晴れやかな雰囲気にも包まれた公演は心地よいものだった。素晴らしいコンサートに感謝する。このような催しを定期的に行うことが日本とロシアの両国民の間の友情の精神を強めるのに役立つと確信している。
[3月31日、セルゲイ・カルギノフ国家院(下院)議員からの礼状]

仙台が、日本が、早く復興するように祈っています。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

遠く離れた日本とロシアがひとつになったことを強く感じた。
[第1959番学校関係者 4月1日]

演奏した方々の心の温かさが伝わりました。
[公演来場者 3月31日 モスクワ]

ロシアの人達に言葉にできない温かさを感じた。音楽を通じて支援への感謝を伝える役割を果たせたと思う。公演の成果を仙台などでの活動に活かしたい。
[仙台フィル楽団員 3月31日 モスクワ]

自分の出した音が遠く、どこまでも伸びていくような、日本のホールでは味わったことがない初めての体験。この経験がオーケストラの記憶としてこれから役に立つ。
[仙台フィル楽団員 3月31日 モスクワ]

この見開きの◎印の写真 ©Anna Rybalco Photography



震災直後のようすや復興に向かう被災地の姿が写真や資料で展示され、聴衆が見入っていた



東北三大まつりのひとつ、「仙台七夕まつり」の飾りもホールロビーに登場



各公演会場で、演奏に先立ち、日露の言葉で「ありがとう」と書かれたステッカーを仙台フィルの楽団員達が聴衆に手渡してプレゼント



サンクトペテルブルクの公演で、耳の肥えた聴衆から大きな拍手が仙台フィルに贈られた



第1959番学校では、楽団員がワークショップを行い、生徒全員が立ち上がって体を動かす盛り上がりぶり◎



第1959番学校で、9年生(中学3年)の生徒が客人を迎える際の伝統的なお菓子カラガヴァイを持ち出してくれた◎



復興・再生へむけて

牡蠣漁再生を通じて故郷の復興を目指す 宮城牡蠣料理欧州巡回 レクチャー・デモンストレーション

日本三景のひとつ、松島湾内に点在する浦戸諸島は牡蠣の一大養殖地として知られています。しかし東日本大震災で大津波に襲われ、翌2012年にはさらに猛暑の影響もあり牡蠣の7割が死滅するという苦難が続きました。再生に向けての模索が続くなか、牡蠣を通じて三陸地方の魅力と復興への取り組みを海外に伝えるプロジェクトが始まりました。

2013年2月、塩竈市浦戸諸島の牡蠣養殖生産者や料理研究家等5名が、パリ(フランス)、ワルシャワ(ポーランド)、ドルトムント(ドイツ)の3都市で、牡蠣を使った郷土料理を紹介するワークショップや講演、デモンストレーションを実施しました。宮城県とヨーロッパのあいだには牡蠣を巡る長い交流の歴史があります。1960年代、フランスで養殖されていた牡蠣に病気が広がり壊滅的な危機に瀕した際、世界各国から種牡蠣が空輸されました。そのなかで宮城県の種牡蠣だけがフランスの試験場での検査に適合し、フランスの牡蠣養殖の危機を救ったの

です。宮城県の真牡蠣はその後フランスからヨーロッパへと広がります。東日本大震災の被災の後、今度は「フランスお返しプロジェクト」として、フランスが東北の牡蠣養殖関係者へ資材提供等の支援を行いました。

このヨーロッパ3都市での催しでは、宮城県産の真牡蠣の歴史、養殖方法、震災後の現状、日本での牡蠣の剥き方、販売方法の解説と同時に、調理のデモンストレーションやワークショップも行われ、牡蠣を使ったさまざまな郷土料理が地元塩竈の地酒とともに振る舞われました。牡蠣を生でしか食べないフランス、牡蠣をほとんど食べる習慣のないドイツやポーランドと、食文化のまったく異なる国々にでも紹介した料理は大好評のうちに受け入れられました。帰国したメンバーから話を聞いた浦戸諸島の牡蠣生産関係者の間では「今後も牡蠣を通じた交流を続けよう」という声が挙がっています。牡蠣の魅力とあわせ、牡蠣漁再生へ邁進する被災地の現在の姿を伝える催しとなりました。

レクチャー・デモンストレーション	パリ[フランス]	2013年2月9日	国際交流基金 パリ日本文化会館	来場者数：66名
	ワルシャワ [ポーランド]	2013年2月12日	ワルシャワ料理学校	来場者数：150名
	ドルトムント [ドイツ]	2013年2月15日	ドルトムント市立 職業訓練校	来場者数：121名



【上】パリでレクチャーを行うプロジェクトのメンバー。(左から)手島、内海公男、内海幸子、渡邊、萩平の各氏◎ 【前頁】ドルトムントで行われた牡蠣剥きの実演 写真提供：在デュッセルドルフ日本総領事館

手島麻記子[レクチャー]
食文化研究家、「しおがま浦戸の牡蠣を世界へ！」実行委員会代表

内海公男[牡蠣剥き実演および牡蠣調理]
牡蠣養殖生産家、宮城県塩竈市浦戸桂島地区カキ部会部長

渡邊せつ[牡蠣郷土料理レシピ作成および実演]
料理教室主宰

萩平和嘉子[ずんだ餅レシピ作成および実演]
フード&テーブルコーディネーター

内海幸子[塩竈市浦戸諸島食文化情報集約および牡蠣調理]
宮城県漁業協同組合・塩竈市浦戸支所係長

協力 しおがま浦戸の牡蠣を世界へ！実行委員会、宮城県、塩竈市、宮城県漁業協同組合塩竈市浦戸支所、塩竈市浦戸桂島地区女性部、株式会社佐浦、亀兵商店、日本酒と楽しむイタリアンの会



試食メニューは「牡蠣の佃煮」、「牡蠣の田楽味噌焼き」、「牡蠣ごはん」、「揚げかまぼこ」、「ずんだもち」、「浦霞純米酒」も提供された



この催しではヨーロッパ産の牡蠣を使用して調理を行った。写真はドルトムントの会場で使用されたフランス・マレンヌ産の牡蠣◎



パリの会場で牡蠣料理を試食する参加者◎ この項◎の写真提供：手島麻記子



パリの会場で参加者を交えて、ずんだもちの白玉団子づくり



ワークショップのメニューは、「牡蠣ごはん」(左上)、「牡蠣の田楽味噌焼き」(右上)、「ずんだもち」(下)

各会場で

パリでは……

仏日友好議員連盟会長のディディエ・カンタン氏は牡蠣生産地でもあるフランス西部のロワイヤン市の市長で、東日本大震災後の日本への支援に関わっている中心人物。催しに来賓として出席したカンタン氏はあいさつのなかで、牡蠣を通じた日仏交流の長い歴史に触れた。



【パリの参加者からのコメント】日仏の牡蠣を通じた交流、震災復興に対する地元の人達の姿が感動的だ

ワルシャワでは……

ワークショップには現地の有名シェフや寿司職人も参加。ポーランドの著名な料理評論家マチェイ・ノヴァック氏が牡蠣の魅力をポーランド全国向けテレビ番組で紹介。



【Life and More誌ネット版】「初めて体験した日本食と牡蠣、ともに大変美味で、ポーランドに普及する価値がある」と催しを紹介

ドルトムントでは……

会場には「生まれて初めて牡蠣を食べた」という参加者もいた。会場の机には復興へのエールとして、宮城県旗と地図、折り鶴が用意されていた。



【ルール地方の「Ruhr Nachrichten」紙】「 Grillされた牡蠣—日本の料理専門家が洗練された繊細な牡蠣の料理を提供」の見出しで催しを紹介



復興・再生へむけて

建築家達の試みを伝える 「3.11—東日本大震災の直後、 建築家はどう対応したか」 講演会

東日本大震災発生直後に実施または計画された建築プロジェクトを紹介する展覧会「3.11—東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」は、2012年3月から世界各地を巡回し、1年間で世界7カ国13都市で開催されました。各地での展覧会にあわせ、建築の専門家達による講演会を行いました。

東日本大震災と建築を巡る展覧会

建築展「3.11—東日本大震災の直後、建築家はどう対応したか」は、建築評論家の五十嵐太郎氏を監修者に迎えて国際交流基金が2012年3月に企画した、東日本大震災から1年の間に被災地で実施または計画された建築プロジェクトを紹介する展覧会です。50以上のプロジェクトを、「緊急対応」「仮設住宅」「復興計画」の3つの段階にわけて、図面や写真付きのパネル、また実際に避難所で使用されたダンボールの家具やシェルター、関連映像、模型などにより構成されています。本展覧会は、2012年3月より3年間にわたり、世界各地の巡回を計画しています。2012年3月からの1年間では、フランス(パリ)、中国(北京・香港・重慶)、韓国(釜山・済州・ソウル・麗水)、ロシア(モスクワ)、アルメニア(エレヴァン)、イタリア(ローマ)、ドイツ(ケルン)、ハンガリー(ブダペスト)を巡回しました。

講演会	釜山[韓国]	ソウル[韓国]	モスクワ[ロシア]	エレヴァン[アルメニア]	香港[中国]	北京[中国]	ローマ[イタリア]	ケルン[ドイツ]
	2012年5月17日	2012年7月5日	2012年6月22日	2012年7月17日	2012年10月19日	2012年11月29日	2012年10月23日	2012年12月12日
	慶星大学校	ソウル歴史博物館	国立建築博物館ルーナ	アレクサンダー・タマニヤン 建築研究所博物館	香港中文大学	清華大学建築学院	ローマ日本文化会館	ケルン日本文化会館
	来場者数：150名	来場者数：60名	来場者数：30名	来場者数：80名	来場者数：150名	来場者数：207名	来場者数：57名	来場者数：78名

展覧会の会期にあわせ、各地で実施された講演会

各国で開催された建築展の会期にあわせ、被災地での建築家の取り組みや、復興の現状をより良く理解してもらうため、本展覧会の監修者や建築家による講演会を実施しました。韓国・釜山では「記憶と建築」、アルメニアでは「東日本大震災が与えた衝撃—日本とアルメニアの共通点と相違点」、中国・北京では「系譜学的建築デザイン」等、各地の事情や聴衆の関心に合わせて、さまざまなテーマを設定しました。各会場には行政関係者や建築専攻の学生等、多くの人が来場しました。香港では四川大地震後の小学校建設に携わった中国人建築家の参加を得て、日本側の建築専門家達と「日本と中国の震災復興」というテーマで議論が行われ、復興のための知恵を国際的に共有し、蓄積していくことの重要性が再認識されました。各講演会では展覧会で紹介された震災「直後」のプロジェクトに関連し、今後の展望についても多くの議論が生まれました。日本と同じく地震の頻発する地域も、地震以外の災害等を経験したところも、災害は自身にも起こり得ることとして東日本大震災の経験を真剣に受け止め、立ち見の出る会場も数多くありました。会場では復興に関する具体的な質問も活発になされるなど、各地で高い関心をもって受け止められました。

講師と講演会のテーマ

釜山[韓国]:「記憶と建築」
宮本佳明/大阪市立大学大学院教授・宮本佳明建築設計事務所代表

ソウル[韓国]:「3.11の災害後、建築家が考え、行動したこと」
五十嵐太郎/東北大学大学院教授

モスクワ[ロシア]:「アーキエイド—建築家による復興支援ネットワーク」
福屋粧子/東北工業大学専任講師・福屋粧子建築設計事務所代表

エレヴァン[アルメニア]:「東日本大震災が与えた衝撃—日本とアルメニアの共通点と相違点」
源栄正人/東北大学大学院教授
芳賀沼整/はりゅうウッドスタジオ常務取締役

香港[中国]:「日本と中国の震災復興」
五十嵐太郎
迫慶一郎/SAKO建築設計工社主宰
朱競翔/香港中文大学副教授

北京[中国]:「系譜学的建築デザイン」
塚本由晴/東京工業大学准教授・アトリエ・ワン

ローマ[イタリア]:「復旧の現状と明日の建築への展望」
五十嵐太郎

ケルン[ドイツ]:「復興の現状、今後の建築の展望」
五十嵐太郎



【上】ローマの会場には若い建築家や建築専攻の学生達が多数来場した
【前頁】ローマでの五十嵐太郎氏による講演会 2点とも©Mario Boccia

各会場で

ソウルでは……

ソウル歴史博物館のカン・ホンビン館長は都市計画の専門家、元ソウル市副市長。この展覧会について「素晴らしい企画。多くのひとと、特に大都市に共通する課題として行政にかかわる人に見てもらいたい」と述べた。



ソウル歴史博物館での展示風景

モスクワでは……

国立建築博物館館長はじめ建築の専門家が多数来場。またロシア有数のニュース番組「ヴェスチ」でも紹介された。質疑応答では「アーキエイドの活動は、ロシアにおいても適用可能か」等、現実的な展開を視野に入れた真剣なやりとりが行われた。



モスクワ国立建築博物館での展示風景

エレヴァンでは……

アルメニアは地震が多く、また原発を有することから、催しは高い関心を呼び、都市建設大臣、非常事態大臣、関連省庁関係者や、建築・建設関係者、地震対策関係者なども多数出席。3.11以降の活動、防災の考え方、災害教育の必要性等が豊富な写真とともに紹介された。

世界の各会場での来場者からのコメント

【香港】

多くの知識を与えてくれた。日本の再建に役立ちたいが、私達になにができるのか知りたい。

国籍や住むところが違うにもかかわらず、社会や人びとを助けるために、震災後の復興・再建に全力をつくしてきた建築家達の傑作を見て素晴らしいと思った。彼らの努力によって、建築家の役目は何なのか改めて考えさせてもらうことができた。

【北京】

日本の建築が周囲の環境によく合わせて設計されていることは、見習う価値がある。

【ローマ】

建築家のエゴや政治のパフォーマンスでなく、純粋に人びとの要望に応えようとする建築家の姿勢に感動した。将来の復興プランについてもっと知りたい。

【ケルン】

危機の克服と復興計画に対する新しい視点を獲得することができた。

第13回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際建築展関連シンポジウム



日時	2012年8月29日	来場者数：80名
会場	ヴェネチア大学 カ・フォスカリ	
パネリスト	伊東豊雄(建築家)、妹島和世(建築家)、菅原みき子(NPO法人陸前高田「みんなの家」)	
進行	フランチェスコ・ダルコ(ヴェネチア建築大学教授)	

国際交流基金は「ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展」の日本館展示を毎回主催しています。2012年は「ここに、建築は、可能か」と題して、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた陸前高田に、被災者のための憩いの場「みんなの家」をつくるプロセスが紹介されました。この展示は第13回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展国別参加部門の最優秀賞である金獅子賞を受賞しました。

会期中、関連シンポジウムを実施し、陸前高田「みんなの家」の他、被災地において進められているプロジェクトについて、日本の建築家と利用者双方からの報告がなされました。



東北を伝える

東北の獅子、ロンドンで舞う 奥州金津流獅子躍 英国公演

岩手県・宮城県の代表的な伝統芸能である鹿踊り^{ししおどり}を傳承する団体、奥州金津流獅子躍連合会の16名が、ロンドンで最大の野外アート・イベント「テムズ・フェスティバル」や、ロンドン近郊オクスフォードの博物館、メイドストーンの美術館で演舞を披露しました。

鹿踊りは、岩手・宮城に傳承され、長い年月、土地の人びとの心の拠り所として舞われてきました。公演会場では、その背景を理解し、より深く鑑賞できるように、鹿踊りについて解説したパンフレットを配布し、観客に好評を博しました。

テムズ・フェスティバルはロンドン中心部のテムズ川周辺で開催される音楽やダンスの催しで、毎年80万人以上を動員しています。ちょうどオリンピック・パラリンピックが開催された2012年夏は、いつにも増して大勢の人が世界からロンドンに詰めかけていました。震災で亡くなった方々への鎮魂や復興への願いを込めて披露された演舞を4万人近くの人が鑑賞し、金津流獅子躍の洗練された美しさと、獅子の勇壮で荒々しい風格に見入っていました。



メイドストーンの市街での公演後、舞い終わった獅子に子どもをはじめ、たくさんの観客が近寄ってきて、話しかけたり近くから眺めたり。温かな交流が生まれた

公演	オクスフォード	2012年9月6日	オクスフォード大学付属 アッシュモリアン博物館
	メイドストーン	2012年9月7日	メイドストーン美術館
	ロンドン [テムズ・フェスティバル]	2012年9月8日・9日	ロンドン市内中心部

奥州金津流獅子躍連合会

岩手県奥州市江刺区、岩手県大船渡市、宮城県大崎市を拠点とする金津流の5団体による連合会。金津流獅子躍は江戸時代に宮城県から岩手県の江刺市(現・奥州市)に伝授されたのが発祥とされ、今日まで神事芸能として受け継がれている。連合会結成後、芸の傳承と後継者の育成のため活動している。国内での公演はもとより、アメリカ・ロシア・エジプト・ブルガリアなど海外からも数多くの招へいを受けている。



会場に配布された奥州金津流獅子躍のパンフレット。鹿踊りの歴史や衣装、舞の意味などについて解説しており、来場者の好評を得た

会場で

来場者のコメント

高い芸術性を持った印象的なパフォーマンスだった。

東北の民俗芸能が紹介されることは大きな意義がある。

出演者のコメント

公演やナイトパレードで、英国の人びとから喝采を浴び、オリンピックのために世界各国から集まっていた人達から「ガンバレニッポン!」等の大きな声援を受けて、苦しかったが獅子躍を復活・傳承してきて良かったと心から感じ、復興への思いを強くした。

東北を伝える

南三陸の高校生ら、鹿子躍を米国で披露 行山流水戸辺鹿子躍 米国公演

宮城県南三陸町の水戸辺^{ししおどり}鹿子躍保存会は、地震と津波の甚大な被害に遭い、太鼓や衣装も失いましたが、仮設住宅等に住みながら稽古を続け、地域の伝統芸能の継承と発展に取り組みんでいます。同保存会の高校生7名と指導者4名が、2012年8月、「第22回日米草の根交流サミット ノーステキサス大会」に招かれ、テキサス州内で計3回の公演を行いました。テキサス・レンジャーズ・アーリントン球場では試合前の始球式で舞を披露。1万6千人の観客が鎮魂と復興の願いを込めた勇壮なパフォーマンスを楽しみ、そのようすは、テキサスを代表するダラス・モーニング・ニュース紙に写真入りの記事で伝えられました。また、NHKによる生中継においても、演舞の様子が紹介されるなど、新聞報道やテレビ中継を通じて日米両国の幅広い人びとに届けられました。公演の期間中、高校生達はアメリカの家庭でのホームステイを通じ、現地の日常生活の一端に触れ、草の根レベルの日米の交流が深められました。

東北を伝える

写真で見る東北の過去・現在・未来 「東北—風土・人・暮らし」 講演会

写真展「東北—風土・人・暮らし」は、写真評論家の飯沢耕太郎氏の監修のもと、東北にゆかりのある9人と1組の写真家の作品で構成した展覧会です。農村、自然、遺跡などさまざまな視点で東北が照らし出された作品が紹介されています。本展覧会は、2012年3月から1年間に、イタリア(ローマ)、オーストラリア(シドニー、パース、ブリスベン)、マレーシア(ジャアラム、ペナン)、フィリピン(マニラ)、中国(北京、武漢、長春、重慶、大連)、インド(デリー)を巡回し、今後も2017年3月まで世界各地を巡回する予定です。

2013年3月、マニラでの展覧会の開催にあわせ、監修者である飯沢耕太郎氏と、出展作家のひとり、津田直氏による対談講演会を、フィリピン国立博物館で実施しました。対談では、東北の伝統や歴史、古来より受け継がれている習俗など、日本の基層文化が残る地としての「東北」について語られました。会場からはさまざまな視点から質問が寄せられ、3.11以前の東北の姿を写した写真展の展示と併せ、東北の奥深い魅力が伝えられました。



写真提供：公益財団法人ジョン万次郎ホイトフィールド記念国際草の根交流センター

公演	アーリントン[レンジャーズ対 タンパベイ・レイズ戦始球式]	2012年8月28日	テキサス・レンジャーズ・アーリントン球場
ダラス	[日米草の根交流サミット 大会閉会式]	2012年9月1日 2012年9月2日	テキサス大学ダラス校クラーク・センター メイヤーソン・シンフォニー・センター

主催 財団法人ジョン万次郎ホイトフィールド記念国際草の根交流センター

助成 国際交流基金、TOMODACHIイニシアチブ

行山流水戸辺鹿子躍保存会

宮城県北部から岩手県南部に伝わる民俗芸能の鹿踊りの流派のひとつ、「行山流鹿子躍」は、南三陸の水戸辺が発祥の地と言われている。水戸辺鹿子躍保存会で傳承の担い手として活躍するのは、主に地域の中学生や高校生。

来場者の声

大きな被害を受けたにもかかわらず、素晴らしい踊りで勇気もらった。

被災後、太鼓や衣装を拾い集め、仮設住宅で生活しながらも、すぐに踊りを復活させたことに胸を打たれた。



講演会 2013年3月9日 フィリピン国立博物館

来場者数：94名

飯沢 耕太郎[写真評論家]

「東北—風土・人・暮らし」展企画監修。著書に『写真的思考』(河出書房新社 2009年)、『アフターマス—震災後の写真』(菱田雄介共著 NTT出版 2011年)など。

津田 直[写真家]

国内外で多数の作品を発表し続け、21世紀の新たな風景表現の潮流を切り拓く新進の写真家として注目されている。2010年から東北地方の縄文時代の遺跡を撮影。

来場者の声

写真を撮るとのことや、日本の歴史や文化について示唆に富む講演だった。

自然との調和を学ぶことができた講義だった。

講演会でのディスカッションは、大学の授業を欠席しても来た価値があった。

写真のことばかりでなく、日本の伝統についても学ぶことができた。



経験の共有・交流

ジャズがつなぐ日米青少年の友情と絆 宮城——ニューオリンズ 青少年ジャズ交流

2005年の大型ハリケーンで甚大な被害を受けた米国ルイジアナ州ニューオリンズ市から高校生を中心とするジャズバンドが来日、宮城県石巻市、気仙沼市、仙台市を訪れ、地元ジュニア・ジャズバンドとの共演や交流の機会をもちました。日米両国の被災地でそれぞれ音楽に取り組む青少年たちが友情と絆を深めました。

ジャズの故郷、ルイジアナ州ニューオリンズ市が2005年に大型ハリケーンで甚大な被害を受けた際、日本から1000万円を超える義捐金が贈られました。その恩返しとして、東日本大震災のわずか1カ月後、津波で楽器や楽譜を流された気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」の子ども達に真新しい楽器がニューオリンズから届きます。2012年10月、今度は楽器を贈ってくれたニューオリンズの子ども達のジャズバンドが、被災地をジャズで応援するために来日しました。

公演	石巻[石巻ジュニアジャズオーケストラと共演]	2012年 10月7日	石巻まちなか 復興マルシェ
	気仙沼[気仙沼スウィング・ドルフィンズと共演]	2012年 10月8日	気仙沼ストリート ライブフェスティバル
	仙台[多賀城ブライトキッズ他と共演]	2012年 10月9日	仙台市宮城野 区民センター
交流会	仙台[東北学院中学校・高等学校吹奏楽部との交流]	2012年 10月10日	東北学院中学校・ 高等学校
公開報告会	2012年10月11日	会場：東京都新宿区四谷区民ホール	

来日したのは米国ティピティナス財団ジャズプログラムのインターン生によるバンドとオー・ペリー・ウォーカー高校ブラスバンドの計16名。石巻ジュニアジャズオーケストラ、気仙沼スウィング・ドルフィンズ、多賀城ブライトキッズ、東北学院中学校・高等学校吹奏楽部と一緒に日米両国のプロミュージシャンからワークショップを受け、ジャズという共通の言語を通して友好を深めました。宮城県各地で開かれたコンサートでは日米の若きミュージシャン達が復興の願いを込め、「セカンドライン」などを堂々と演奏。総計千人近くに及ぶ地元の観客から盛んな拍手と声援を受けました。その模様は日本全国に報道されたほか、米国でABCニュースのテレビ番組にも取り上げられるなど、広く紹介されました。また、オー・ペリー・ウォーカー高校とティピティナス財団には、日本の復興大臣から感謝状が贈られました。2013年夏には気仙沼スウィング・ドルフィンズがニューオリンズを訪問し、交流はさらに続きます。



ティピティナス・インターンバンド / Tipitina's Intern Band
 有名なサクソ奏者、ドナルド・ハリソン・ジュニア氏が芸術監督を務めるティピティナス財団インターン生によるジャズバンド。同財団のインターンシップ・プログラムには音楽に関心を持つ13歳から19歳までの青少年が参加。

オー・ペリー・ウォーカー高校選抜ブラスバンド /
 O. Perry Walker's Chosen Ones Brass Band
 ウィルバート・ローリンズ・ジュニア氏指導のもと、9～12年生までの生徒による、ニューオリンズ伝統のリズミカルなビートと管楽器のサウンドが自慢のブラスバンド。

石巻ジュニアジャズオーケストラ
 石巻市・東松島市・女川町の生徒たちのジャズオーケストラ。街角に響きわたるビッグバンドジャズによって震災復興に奮闘する石巻地域の人びとを勇気づけようと、2012年6月に結成された。

気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」
 1993年、気仙沼地方のアマチュア音楽家が子ども達に音楽の素晴らしさを伝えるために創設したバンド。小学5年生から中学3年生の生徒達で編成され、ジャズを中心にポップスやスクリーンミュージックなど、様々なジャンルの曲に挑戦している。

多賀城ブライトキッズ
 多賀城東小学校の鼓笛隊、トランペット鼓隊、金管バンド、吹奏楽部を経て発展した小学生ジャズバンド。宮城県内を中心に活動し、2005年、2006年にはライブアルバムをリリース。東日本大震災後、ニューオリンズから楽器寄贈を受けた。

東北学院中学校・高等学校吹奏楽部
 東北学院中学校・高等学校に在籍する中学1年生から高校3年生までの部員を擁する吹奏楽団。2012年度は吹奏楽コンクール東北大会で金賞を受賞、東日本学校吹奏楽大会に初出場を果たす。



【左上】石巻ジュニアジャズオーケストラ 【上右】気仙沼スウィング・ドルフィンズ 【下】多賀城ブライトキッズ 【前頁】ニューオリンズの高校生と共演する東北学院中学校・高等学校吹奏楽部のメンバー
 この項の撮影すべて：相川健一

共催	日本レイ・アームストロング協会、ティピティナス財団
協力	みやぎ音楽支援ネットワーク、東日本大震災復興支援JFプロジェクト、早稲田大学ニューオリンズジャズクラブ

参加者の声

日本のジャズバンドメンバーから

震災後、仲間のようすがわからなくてとても不安だった時に、楽器を寄贈してもらい、それがきっかけでバンドメンバーが集まる事ができたことが、大きな励みとなった。
 [中学生のメンバー]

震災で定期コンサートが中止となって、今年はまだ演奏する機会はないのかと思っていた。地元でこのようなステージを用意してもらい、すごく嬉しかった。機会があれば、今度は自分の力で今日会ったアメリカの人達に会いに行き、また一緒に演奏したい。
 [中学生のメンバー]

被災して、身近な人を亡くした辛い体験が心の傷となっている子どもも少なくない。心の底から楽しめるエンターテインメントの重要性は高まっている。震災前には考えもしなかった、ジャ

ズの本場ニューオリンズの人達が我々を助けてくれた、そんな経験は子ども達にとって大変貴重。交流が長く続いて欲しい。
 [指導者]

米国のジャズバンドメンバーから

コンサートは素晴らしかった。災害から立ち直ろうとする人がたくさん来てくれた。演奏でみんなが元気になったように感じた。

被災地の子ども達は僕らがかつて経験した苦難を経験している。希望やインスピレーションを被災地に届けることが出来たと思う。日本から受け取った厚意に応えられたかな。

日本の子ども達は、僕らが大好きな音楽を同じように愛している。演奏のスタイルや曲の解釈は違うけれど、ジャズを愛しているという点で、僕らは仲間だと感じた。





経験の共有・交流

はるかな友に心寄せて 南三陸——チリ 青少年音楽・詩作交流

ワークショップ	日本	2012年10月—2013年2月	宮城県志津川高等学校
	チリ	2012年10月—2013年2月	ガブリエラ・ミストラル校

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町と2010年2月のチリ大地震で被災したコンステイトゥション市。ふたつの町に住む高校生達が被災経験を振り返ってつくった詩と物語を交換しました。詩と物語は歌となり太平洋を横断した交流が生まれました。

南三陸町とチリ共和国との友好関係は1960年のチリ地震にさかのぼります。この時、チリ地震によって引き起こされた津波は太平洋を越えて三陸沿岸に到達し、宮城県南三陸町、岩手県大船渡市等は大きな被害に見舞われました。地震津波から復興を遂げた両国友好の印として、1991年、チリから南三陸町にモアイ像のレプリカが贈られるなど、チリ共和国と南三陸町は交流を続けてきました。

このような背景の下、東日本大震災を経験した南三陸町志津川高校の生徒達と、2010年のチリ大地震を経験したコンステイトゥション市ガブリエラ・ミストラル校の生徒達が、日本とチリ両国のアーティストによるワークショップを重ね、自分達の国で起きた地震や津波の体験を振り返り、太平洋の彼方で同じ境遇にある同世代に思いをはせながら、それぞれの気持ちや考えを詩や物語に表現しました。詩や物語は、両国の音楽家の力を借りて歌となり、海の彼方で同じような経験をした友への励ましのメッセージとして、両国の生徒達の間で交換されました。

公演	チリ	2013年2月27日	チリ大地震3周年追悼コンサート	マウレ河畔の特設ステージ（コンステイトゥション）
		2013年3月1日		カラビネロス劇場（サンティアゴ）
日本	日本	2013年3月11日	東日本大震災2周年南三陸町追悼式	南三陸町総合体育館
		2013年3月12日	日本—チリ交流コンサート	南三陸町総合体育館文化交流ホール
		2013年3月15日	東京での報告会&ミニコンサート	国際交流基金本部

日本とチリで行われたワークショップ

2012年秋、日本とチリ、それぞれの地で、高校生達のワークショップが行われました。

ガブリエラ・ミストラル校3年B組の生徒達は、2010年2月27日未明に発生したチリ大地震を振り返り、地元の作家の指導を受けながら、自分自身の体験や町の人びとへの聞き取りに基づく7編の物語を創作しました。チリの国民的歌手ケコ・ユンゲ氏は、ガブリエラ・ミストラル校の生徒達の物語に込められたメッセージを汲み取り、楽曲「太陽より遠くへ」を作詞作曲し、生徒達とともにその曲の練習を重ねました。

一方、志津川高校2年4組の生徒達も、震災からこれまでの自分自身の生活を振り返り、グループ作業を通じて言葉を出し合いながら被災から1年半の心象風景の移り変わりを、一編の詩に表現しました。また音符の並べ替えゲームを通じて詩を音符に乗せる作業を行い、アーティストの協力によって組曲「はるかな友に心寄せて」が作曲されました。さらに生徒達は、東日本大震災2周年追悼式での合唱に向けて完成した曲の練習を始めました。同校の生徒による合唱は、チリの被災地で行われる追悼式典でも紹介するため、映像の収録も行われました。

ガブリエラ・ミストラル校で創作された物語は志津川高校へ、志津川高校で創作された詩はガブリエラ・ミストラル校へと贈



【上】志津川高校で音符の並べ替えゲームを行う生徒達 写真提供：吉川由美
【前頁】ガブリエラ・ミストラル校の生徒は南三陸町の被災状況について説明を受けた

宮城県志津川高等学校

宮城県本吉郡南三陸町に所在する県立高校。普通科2年4組の生徒38名が東日本大震災以降の生活を振り返り、大津波の被害から少しずつ立ち上がっていくようすを描いた6つの章からなる詩を、クラス全員で創作した。

ガブリエラ・ミストラル校

チリ中部マウレ州タルカ島の港町コンステイトゥション市に所在する高校。3年B組の生徒45名が、地元の作家、フアン・ムニョス氏によるワークショップを通して7編の物語を創作した。

られ、それぞれの学校でお互いの作品を鑑賞し、太平洋の向こうで被災した同世代の仲間思いをはせながら、被災体験を共有する取り組みもあわせて行われました。

ふたつの追悼式典で披露されたふたつの歌

日本とチリ、ふたつの国で完成した歌は両国で復興支援に取り組むアーティストに託され、それぞれの国の追悼式で披露されました。

チリ大地震から3年目を迎える2013年2月27日深夜、津波により多数の犠牲者を出したオレゴ島を望むマウレ河畔の特設屋外ステージで、チリ大地震3周年追悼コンサートが開催されました。追悼式前日には、日本側の協力アーティストである民謡ユニット法笙組とギタリストの佐藤正隆氏がコーディネーターとともに志津川高校の心のメッセンジャーとしてガブリエラ・ミストラル校を訪れ、南三陸町の被災状況や東北の民謡の魅力を紹介する機会も設けられました。追悼コンサートでは、約1,500人の観衆を前に、舞台上の大スクリーンで南三陸町の被災状況や志津川高校の生徒達のメッセージを紹介。日本側の協力アーティストが志津川高校の生徒達の歌声とともに「はるかな友に心寄せて」を披露しました。また、ガブリエラ・ミストラル校の生徒有志がケコ・ユンゲ氏とともに「太陽より遠くへ」を歌いました。当日は、ピネラ大統領もコンステイトゥションを訪れ、コ

共催	在チリ日本国大使館、「挑戦、立ち上がろうチリ」(Desafio Levantemos Chile)
協力	南三陸町、宮城県志津川高等学校、ダ・ハ プランニング・ワーク、仙台市民交響楽団、トヨタ自動車、「トヨタ・子どもとアーティストの出会い」仙台・宮城実行委員会、南三陸ホテル観洋、南三陸町観光協会、南三陸町国際交流協会、ENVISI、福武財団、メディア・ゲート・ジャパン、アメリカン航空、セルバンテス文化センター東京、コンステイトゥション市、ガブリエラ・ミストラル校、チリ軍警察文化事業団、チリ銀行、ARAUOCO、Cabanas Playa El Cable
後援	駐日チリ共和国大使館

ンサートの模様は地元テレビ局を通じてライブ中継されたほか、インターネットを通じて全世界に発信されました。

3月1日には首都サンティアゴで、同じ形式のコンサートが開催され、ミストラル校の代表生徒2名らが共演。500名以上の観客が日智両国の震災復興を願いました。チリでのふたつのコンサートには、チリ大地震直後、生存者救出と被災地の治安維持にあたったチリ軍警察の音楽隊が共演し、チリの主要メディアでも多数とりあげられました。

一方、東日本大震災から2年となる2013年3月11日、南三陸町で開かれた東日本大震災2周年追悼式では、ガブリエラ・ミストラル校の心のメッセンジャーとしてケコ・ユンゲ氏が2名のミュージシャンとともにチリから来日し、式典に参列しました。約1,500人の参列者が見守る中、志津川高校の生徒達が「はるかな友に心寄せて」を日智両国のアーティストと共に献歌しました。この演奏には仙台市民交響楽団のメンバー有志も伴奏に加わりました。また、会場に設けられた巨大スクリーンではチリの被災状況やミストラル校の生徒達のメッセージを紹介し、ユンゲ氏が「太陽より遠くへ」を献歌しました。

翌3月12日には、南三陸町の復興を祈念し、日本とチリ両国の音楽家が南三陸町の高校生有志と共に交流コンサートを行いました。一連の事業を通じて、太平洋を越えた被災地同士が経験やビジョンを共有し、励まし合い支え合いながら、復興に向かつて歩む友好を結ぶ機会となりました。



震災から2年にあたる2013年3月11日、南三陸町での追悼式典で「はるかな友に心寄せて」を合唱する志津川高校の生徒達



2013年3月1日、チリのサンティアゴで開かれた、チリ大地震から3周年のコンサートでは、ケコ・ユンゲ氏他、チリのミュージシャンとともに、日本からチリを訪ねた日本の協力アーティストが、スクリーン上の志津川高校の生徒達と共に楽曲を披露した



東京で行われた本事業の報告会&ミニコンサートでは、来日したユンゲ氏と日本のミュージシャンが共演。ふたつの国の高校生達の詩と物語から完成したふたつの楽曲が披露された



2013年3月12日、南三陸町での交流コンサートでは、ユンゲ氏と日本の協力ミュージシャン、志津川高校生徒有志が共演した

この頁の写真すべて 撮影：相川健一

法笙組

福島県須賀川市の民謡家、小湊法笙(民謡小湊流2代目家元)と、美鶴、美和、昭尚からなる家族ユニット。志津川高校のワークショップで生徒がつくった詩の一部を邦楽のスタイルで編曲した。

佐藤正隆

ギタリスト。1988年、第1回仙台国際ギターフェスティバル、ジュニアギターコンクールで優勝、仙台市長賞を受賞。東日本大震災以降、さまざまな追悼集会で演奏を行う。志津川高校のワークショップで生徒達が紡ぎ出したメロディーから作曲を担当。

吉川由美

プロデューサー・演出家。東北六魂祭のパレード演出などを手がける。八戸ポータルミュージアム「はっち」文化創造事業ディレクター、宮城大学非常勤講師。南三陸町でアートを通じた復興に取り組む。南三陸町復興応援大使。

ケコ・ユンゲ/ Keko Yunge

シンガーソングライター。1984年のデビュー以来、数々のヒット曲を発表したチリの国民的歌手。チリ大地震後、音楽を通じた社会貢献活動を本格的に開始し、被災地復興支援に精力的に取り組む。

エクトル“ティト”ペゾア/ Hector "Tito" Pezoa

ギタリスト。1970年に活動を開始。チリ音楽界への貢献から、チリ教育省の表彰を受ける。1999年、チリ音楽著作権協会から最優秀パフォーマー賞を受賞。ケコ・ユンゲ氏とは過去15年にわたり共演を重ねる。

ローラ・ブライヤー/ Laura Bryer

ヴァイオリニスト。英国、スペインで活躍したのち、2010年以降、活動の拠点をチリに移す。アンドレス・ペーゾ大学カメラータの一員として、またチリ交響楽団の第2ヴァイオリン奏者として活動。

はるかな友に心寄せて

～宮城県志津川高校2年4組の38名が創作した詩より～

今は暗闇の道
でもきっといつか光は差し込む
きっといつか心の底から
笑える時が来る

やっぱり海がきれいだと
ずっと忘れない
一緒に歩いたこと
一緒に笑ったこと

つらいけど
ひまわりのように
空にまっすぐ伸びていこう
上を向いて歩いて行こう
一輪の花に
ひとつひとつの花びらがあるように
私たちはひとりじゃない
一緒に未来を信じて歩いて行こう

ひとりじゃないよ
ぼくたちはつながっている
支え合って一歩ずつ
進んで行こう
世界はつながっている

がんばった分だけ
楽しくなれる
転んだ分だけ
強くなれる

一生懸命生きていれば
必ず光は見えるもの
今ある生命を大切に
We never give up!

太陽より遠くへ

作詞作曲 ケコ・ユンゲ
朗読文 カブリエラ・ミストラル校3年B組の生徒たちの物語より

El mar viene y va,
como las olas de la vida
Y yo mi amor te fui a buscar,
mucho mas alla del sol.

海は行き来する
人生の波のように
そして私は愛する
君を探しに行った
太陽より遠くへ

〔朗読〕
午前3時34分、マグニチュード8.8の地震がチリの中南部を襲った。そこで世界が終わってしまうのかと、私は思った。地震からおよそ20分後、海辺から非常に大きな波がこちらに向かって来るのが見えた。行く手にあるものを破壊しながら、海が押し寄せて来ると巨大な音と大勢の人々の叫び声が聞こえて来た。その後、静けさが町を支配した。みな呆然自失、身動きが取れない状況だった。

瓦礫へと変わり果てた、私の美しい町を眺めた。人々の夢が地面に散らばっていた。失った全てのものをどのように再建すれば良いのだろうか？ どうすれば人々の心を再び希望に満ちた状態に戻し、新しい生活を始めることができるのだろうか？

その日は、夜明けが遅かった。太陽の最初の光がようやく輝いたとき新しい一日の始まりとともに私の成長を見守ったコンステイトゥシオンの町を再建するための希望も同時に訪れたことに気付いた。

参加者の声

志津川高校2年4組生徒からは……	ガブリエラ・ミストラル校からは……	交流コンサートの来場者からは……
詩にはみんなの町に対する思いや復興に対する思いが詰まっている。自分達が思っていること、感じたことを率直に表現できた。	志津川高校の生徒達の詩を読み、感動した。私達が置かれている境遇、地震と津波に被災した状況が似通っていることが良く分かった。〔生徒〕	チリと日本の人と人、国と国のつながりを再認識しました。
この歌を通して、町の復興やチリとの交流につなげられたらいいと思う。私達のような若い人達が頑張る力を与えることも改めて必要だと思った。	南三陸町の写真を見て、コンステイトゥシオンの風景ととてもよく似ていることに気付いた。太平洋を越えて、同世代の日本の友達との共同プロジェクトが出来ることを幸せに思う。〔生徒〕	音楽は言葉を超えて伝わってくるものがある。日本・チリ両国の歌も音楽も素晴らしい、邦楽とチリの音楽の組み合わせが印象的。この町で暮らしていこうと思いました。
たくさんの人に支えられていると思った。人と人との繋がりが何よりも強く大切だと思った。言葉が伝わらなくても、心を通わせることができた。	テレビで日本そして、津波の映像を見て衝撃を受けた。震災時の日本人の冷静な立ち振る舞いには感動を覚えた。そうした日本人の精神性、日本文化にも敬意をもっている。南三陸町も漁業が盛んな町だと聞いているが、似通った境遇の町同士、同じプロジェクトを共有していると思い、勇気もらった。	ケコ・ユンゲ氏から 志津川高校の生徒の皆さんがつくった詩には、震災後のさまざまな気持ち、出来事、状況、時間軸に沿った物事の変化などが、見事に表現されています。驚くべきことに、皆さんの詩を読んで、チリで津波が起きたときに私自身が抱いた感情が蘇ってきました。皆さんの詩に描かれた出来事、環境、体験は、私達がチリで経験したことと全く同じ現実を反映しています。これが、このプロジェクトの素晴らしいところですよ。



撮影：相川健一



経験の共有・交流

気仙沼、海の宝もの

日本—フランス紙芝居共同制作

フランスの人気イラストレーター、フロラン・シャヴエ氏が、東日本大震災の被害を受けた宮城県気仙沼市に滞在し、作家の松木直也氏と共同で紙芝居を制作しました。

紙芝居は、気仙沼市唐桑という港町で100年以上にわたり育てられてきたホヤを題材とし、気仙沼の「ホヤ大使」に任命されているフランス料理の三國清三シェフの視点から、ホヤの味覚や歴史が子ども達に語られます。東日本大震災による被害で唐桑のホヤは全滅しかけていましたが、「ホヤおじさん」と呼ばれるある生産者が、サルベージ船が海底から引き上げた瓦礫の中を何か月も根気よく探し続け、ホヤの種苗を奇跡的に発見、もう一度ホヤを育てようと養殖を再開した物語です。

完成した紙芝居は、日本とフランスの小学校で読み聞かせ会が行われ、両国の子ども達に紹介されました。パリ日本文化会館での紙芝居の読み聞かせ会では、被災した子ども達のための復興支援をテーマとした講演会も併せて行われました。気仙沼のホヤが「海の宝物」として大切に守られ、生産者の努力で元気に育っていることが、気仙沼市滞在を通して描かれたシャヴエ氏の鮮やかな絵とともに子ども達へ伝えられました。



このプロジェクトに関連し、「震災復興と未来を担う子どもたちのために」と題した講演会が、2013年3月19日、パリ日本文化会館で開催された。パネルにはシャヴエ氏、三國氏、そして気仙沼教育委員会と子どもの食育に関わっている地元酒造会社、男山本店の代表取締役、菅原昭彦氏を迎え、この紙芝居の翻訳を担当した内坂芳美氏がモデレーターを務めた

制作期間	2012年8月—10月		
読み聞かせ会	日本	2012年10月22日	宮城県気仙沼市立唐桑小学校
		2012年10月23日	東京都新宿区立四谷小学校
フランス		2013年3月19日	パリ日本文化会館
		2013年3月20日	パリ・フェリックス・フォール小学校

フロラン・シャヴエ / Florent Chavouet
イラストレーター。日本滞在をもとに描いたスケッチ集『東京散歩』を日仏で出版。本プロジェクトのためにフランスで行われたコンペで入選し、紙芝居を制作。

松木直也
ライター。著書に『オシャレな舌—スーパーシェフ三國清三の軌跡』（風塵社 2000年）、『ミクニの奇跡』（新潮社 2003年）ほか。

三國清三
料理研究家。フランス料理店オーナーシェフ。東北で食育を通じた被災地支援を行っている。気仙沼市より「リアスさんりく気仙沼大使・ホヤ大使」に任命されている。

紙芝居タイトル「気仙沼、海の宝もの」
絵 フロラン・シャヴエ
文 松木直也
訳 内坂芳美、コリーヌ・カンタン



国内関係者の声

このような形で自分達の取り組みを国内外で知ってもらえることは、本当に有り難いことです。
[気仙沼・ホヤ養殖生産者]

地域に対する愛着と誇りが心の支え。こうして皆さんから目に向けて貰っていると実感出来ることは、さらに大きな励みになります。
[気仙沼・読み聞かせ会参加者]



経験の共有・交流

〈北〉でつながる世界

ノルウェー・スコットランド アーティストの喜多方滞在制作

ヨーロッパの「北」、ノルウェーとスコットランドから3人のアーティストが来日し、喜多方アーティスト インレジデンス事業により福島県会津地方に2カ月間滞在しました。日本の北国、福島県出身のアーティスト丸山芳子氏と共に、北の文化の共通性や差異を意識しながら作品を制作しました。

4人のアーティスト達は喜多方市内の農家に民泊して地元の人との交流を深め、会津地方各地を訪問して伝承の行事や手仕事を体験しました。また原発事故の影響で住むことの出来なくなった県内沿岸地域を視察し、被災地域とそこからの避難者を受け入れている会津地方、双方の人びとの現状について理解を深めました。訪れた仮設住宅集会所では、スコットランドとノルウェーの暮らしや先住民族について紹介し、手づくりの郷土料理やお菓子を一緒に楽しむ催しや、避難している人達とのワークショップを行いました。

アーティスト達は、市内の空き民家で週に一度のミーティングを重ねながら作品を構想し、丸山氏が企画する展覧会、「精神の〈北〉へ」にゲスト・アーティストとして参加し、喜多方市の登録有形文化財に指定されている三十八間蔵でそれぞれの作品を発表しました。仮設住宅集会所でのワークショップで協働制作した作品や、人びとが去った被災地をカヤを用いて土間に表現した作品、雪国喜多方を独自の方法で表現した写真などが展示されました。会津地方の滞在と被災者との交流から生まれた作品は「芸術で福島を支えたい」というアーティストの試みとして地元でも高く評価されました。

伝統工芸の「ヒロロ縄ない」を体験した4人のアーティスト達。左からオース、(ひとりおいて) ハウグトロ、丸山、グリアスンの各氏



アーティスト滞在制作期間	2013年1月—3月	福島県喜多方市
共催	IORI倶楽部、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会	
後援	福島県立博物館、FM喜多方、福島民報新聞社、福島民友新聞社	
協力	NPO法人まちづくり喜多方、NPO法人喜多方グリーンツーリズムサポートセンター、喜多方蔵の会	

スー・グリアスン / Su Grierson
アーティスト。ビデオ、音、写真、コンピューターを使った作品を制作。英国・スコットランド出身。

ヴィグディス・ハウグトロ / Vigdis Haugtro
アーティスト。彫刻、ドローイング、インスタレーションの作品を制作。ノルウェー出身。

マルグレーテ・オース / Margrethe Aas
建築家。トロンハイム市にて景観設計や都市計画に携わる。ノルウェー出身。

丸山芳子
アーティスト。地域、場が持つ背景から生まれるインスタレーションや絵画を制作。福島県二本松市出身。

アーティスト インレジデンス喜多方
蔵の街として知られる喜多方市で、使われなくなった蔵をアーティストによる滞在制作拠点と発表の場として利用している。



会津若松市河東学園仮設住宅集会所で行われたアーティストと仮設住宅に暮らす人達とのワークショップの様子

国内関係者の声

一緒に過ごすメンバーが変わることで見える世界が一変した。言葉を越えた相互理解にアートが良い仲立ちをしてくれました。
[アーティスト達を受け入れた、IORI倶楽部 金親文史氏]

福島の今を伝えることができました。そして彼女らがそれを母国で伝えてくれることと思います。
[アーティストの受け入れに協力した、福島県立博物館 小林めぐみ氏]

「震災を乗り越えて——世界とつながる——」2012年度事業を終えて

2012年度に実施した事業について、事業を終えた後の関係者の声やまわりの反応、新たな動きのいくつかを紹介します。

仙台フィルはロシア公演を終えて

2013年4月、凱旋演奏会を地元仙台で開催。チケットは事前に完売し、演奏会は満席となり、多くの市民がロシア公演の成功を喜んだ。楽団の今後への期待の高まりが感じられた。



「活動の姿勢がよりたくましくなった。帰国後過酷なスケジュールが続いてるが実に前向きだ」(仙台市関係者)

「オーケストラの音が以前より力強くなった。ロシアで演奏し、自分達の音に自信をもてるようになった」(仙台フィル楽団員)

「帰国後の定期演奏会ではロシア公演の映像を流し、仙台駅や街の中心部での演奏のときもロシア公演の写真を展示するなど報告に努めている。市民の人達からは仙台フィルを誇りに思うなど多くの好意的な反応が寄せられている」(仙台フィル楽団関係者)

「私達は食べ物をつくることは出来ない。家を建てることも出来ない。でも傷ついた人の心を癒すことが出来る。これからもこうした活動を続けたい」(仙台フィル楽団員)

宮城牡蠣料理欧州巡回の後、

宮城県塩竈市で、参加したメンバーから浦戸地区の漁業協同組合ほか関係者への報告会が行われた。



「これまで牡蠣生産者は“牡蠣がキロあたりいくらで売れるか”という産業としての視点しかもっていなかったが、世界と接点をもつことにより、地元の牡蠣の養殖やその調理方法が文化であるとの認識をもつことができた」(報告会参加者)

「宮城の牡蠣の“種牡蠣”は、フランスやカナダに輸出されていることは知っていたが、このような機会を通じて海外の牡蠣生産者の顔が見えたり、海外でも宮城の牡蠣をちゃんと認識してくれていることを知り、自分達も向こうの生産者と交流しようという機運が生まれた」(報告会参加者)

「浦戸漁協は、いま復旧から復興へのステージに入った。そんな折に漁協関係者が海外に派遣されたことは大きな励みとなった。欧州各地で宮城の牡蠣が歓迎されたことを、大変嬉しく思う」(報告会参加者)

奥州金津流獅子躍英国公演の

メンバーは、帰国後の2012年10月、岩手県奥州市での報告会で、奥州市議会議員や市の教育委員会担当者などに対して英国公演について報告した。

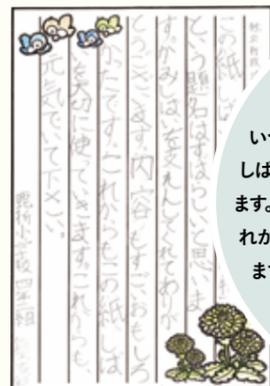


「被災地で受け継がれる文化を多くの人に見てもらえたことに大きな意義を感じる」(保存会メンバー)

「海外公演はこれまでも何度か実施しているが、英国でさまざまな人びとから熱い賞賛が寄せられたことが公演団の励みになった」(保存会メンバー)

日仏共同制作で完成した紙芝居は

気仙沼市の小学校にも寄贈された。2013年8月、紙芝居を見た小学生から手紙が届いた。



「この紙しばいは『気仙沼の宝物』という題名はすばらしいと思います。かみしばいを支えんしてくれてありがとうございます。内容もすごいおもしろかったです。これからもこの紙しばいを大切に使い続けます。これからも元気でいて下さい。」(寄贈先の鹿折小学校4年生の生徒の感想文)

宮城—ニューオリンズ青少年ジャズ交流で、

米国の高校生達が来日した翌年の2013年8月には、気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」がニューオリンズを訪れ、現地の中学生・高校生と交流。ジャズの祭典「サッチモ祭」に出演した。



2点とも©Daniel Erath

「ニューオリンズを見て、私達も故郷を大事にしたと感じた」「カトリーナで被災した場所も着々と復興が進んでいて、ハリケーンに備えた家や街並になっていた」「町を歩いていると、“テレビで見たよ”とか“演奏上手だったよ”と話しかけてくれる人がたくさんいて本当に嬉しかった。感謝の気持が行く前より増えました」「いろいろな人が“Oh!スウィング・ドルフィンズ”って言うので、すごく嬉しかった。たくさんの方が応援してくれているんだなあと感じた」(上記すべて、ニューオリンズを訪問したスウィング・ドルフィンズメンバー)

南三陸—チリ青少年音楽・詩作交流の

プロジェクトが女優の吉永小百合さんの目にとまり、2013年5月、吉永さんがパーソナリティを務めるラジオ番組で志津川高校の生徒たちの詩や歌が紹介された。また、この事業を知った、日本有数の拡声器メーカーが、チリとインドネシアの被災地に防災用拡声器を寄贈。ケコ・ユンゲさんには復興大臣より感謝状が贈られた。



「ボランティアの人がどれだけ話を聞いてくれても、テレビでニュースキャスターがどれだけ同情の涙を流しても、実際被災した人間の気持ちは分からないと思う。でも、チリと志津川の被災した人同士で話をすれば、お互い分かり合える。遠いチリで同じような経験をし、同じ思いをしている人がいると知って、勇気をもらいました。今度は私がいろいろな人に勇気を与えたいです」(志津川高校2年4組の生徒)

「コンサートに来た南三陸町の知人が、高校生の言葉に触発されて、もっとも言葉にした対話が必要だと改めて強く思った、と感動したようすで伝えてくれた。胸の奥にある想いを言語化してゆく作業は、精神の開放にも繋がると感じている。ひとりひとりの心の復興の時間軸の違いもあるだろうし、感じ方や表現の仕方は違おうだろうが、あきらめずに続けて行くことが大切だろう」(日智交流コンサートで志津川高校の生徒達の詩を朗読した仙台市在住の朗読家)

ノルウェー・スコットランド アーティストの喜多方滞在制作で

アーティストは各自のブログで滞在についての発信を続けた。アーティストが帰国した後の2013年6月、スコットランドで喜多方滞在の成果を盛り込んだ個展が開催され、さらにアートプロジェクト「精神のく北へ」vol.1 記録集がつけられた。(以下のコメントは記録集より一部抜粋)



「3.11による困難をまだ抱えており、被災者の方々が新たな暮らしに向けて定住ができない状態であるけれども、核汚染の危険性は喜多方エリア内ではそれほど深刻ではないということを通して見て来た。私はスコットランドの人びとに、この事を伝えようと思っている」(スー・グリアスン)

「風景、手工芸、建築、伝統と知識は、建築家としてだけでなく、人間としての私を深く感動させ続けた。(略) 福島の人びとにとって万事が良くなるように祈り、そして私が見たことを人びとと話あうことが出来るように願っている」(マルグレーテ・オース)

「私は、深遠な文化のなかにゆっくりともぐりこみ、私の皮膚の下にゆっくりと取り込んでいった。(略) 会津地方は今、私の心の真珠となり、またいつか戻って来ることを切望する、心に留める地となった」(ヴィグディス・ハウグトゥロ)

<http://www.jpff.go.jp/>

2013年10月発行

編著・発行：国際交流基金文化事業部

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

TEL.03-5369-6060 FAX.03-5369-6038

編集：ita&co [長谷川直子] デザイン：岡本健 + [岡本健・遠藤勇人] 印刷：東京印書館 表紙撮影：林明輝

©The Japan Foundation 2013

